

令和7年度 調布市立若葉小学校 学校評価報告書（学校長 内藤 みゆき）

学校の教育目標

◎かしこく（しっかり考え、すすんで学ぶ子） ○やさしく（思いやりのある子） ○たくましく（明るくたくましい子）

目指す学校像(ビジョン) 例) 学校像, 教員像, 児童・生徒像

「笑顔あふれる『たい※』が泳ぐ学校」※「～したい」「やってみよう」等といった前向きな思いやエネルギー ～言葉と向き合いながら心を耕し考える力を伸ばしていく子供～

調布市立学校における共通した領域 <短期的な経営目標>

	1 豊かな心(徳)	2 確かな学力(知)	3 健やかな体(体)	
自己評価	(1) 具体的な取組 ①月1回の心の健康観察、年3回の児童アンケートや月1回の校内委員会といじめ対策委員会、週1回の生活指導夕会での情報共有を、個に応じた支援や組織的対応につなげ、児童の安心感につなげる。 ②規律の定着を図るとともに自己指導能力を高める。心の教育を充実させ、自他の命を尊重する人権意識を基盤に「いじめはどんな理由があってもいけない」という意識の向上を図る。	(1) 具体的な取組 ①主体的・対話的で深い学びを目指した授業改善に取り組むとともに、児童の学習意欲を喚起し、考えることや意見交流することの楽しさを味わわせる授業づくりに努める。 ②教科担任制や交換授業の推進を授業改善につなげ、児童にとって分かる喜びが実感できる授業づくりと教員の指導力向上を同時に目指す。	(1) 具体的な取組 ①体力向上を図る取組（体育朝会・縄跳び月間・休み時間等の第四中校庭借用〈6月迄〉・クラブ活動でのNTT施設借用・屋上の一部運動場化と活用）を工夫し、運動の楽しさを味わわせる。 ②教科担任制や交換授業、交換HR等を発達段階に応じ全学年で推進する。学年全体で学年の児童を見る意識を高め、多面的な児童理解と相談しやすい環境作りにつなげていく。	
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	
	①児童アンケートの関連項目への肯定的回答目標：(1)90%以上、(2)70%以上 (1)「学校が楽しい」結果：87.1% (2)「困ったり悩んだりした時に相談できる大人が学校にいる」結果：75.8%	①児童アンケートの関連項目への肯定的回答目標：昨年度比+3Pt以上 「授業に主体的に取り組んでいる」→昨年度比 +3.3Pt	①学校評価アンケート(児童・保護者)の関連項目への肯定的回答目標：70%以上 結果：「健康教育」児童：76.9% 保護者：84%	
	②児童アンケートの関連項目への肯定的回答目標：(1)90%以上、(2)95%以上 (1)「基本的生活習慣」結果：83.8% (2)「いじめはどんな理由があってもいけない」結果：96.3%	②児童アンケートの関連項目への肯定的回答目標：昨年度比+3Pt以上 「授業がよく分かる」→昨年度比 +4.3Pt	②児童アンケートの関連項目への肯定的回答目標：85%以上 「先生は、自分のよいところを認めてくれている」結果：71.7%	
学校運営協議会評価	学年の教員全員で学年の全児童を見ていく体制であることや、教科担任制又は交換授業の取組を全学年で実施していることにより、子供たちが相談できる窓口(大人)が増えていることがアンケート結果から推測できる。学校公開等の保護者の目がある場であっても、礼を欠く言動を見せる児童が一部見受けられ、学校だけでなく家庭・地域が一体となって児童の指導に当たっていく必要性を大いに感じる。		アンケートの「授業がよく分かる」項目の結果が目標よりも高い数値となったのは、一つの授業を複数学級で実施し授業改善を図っていくことができる教科担任制の効果が大きいのではないかと。授業を参観した際に、どの学年も対話型の授業を工夫していると感じた。児童の主体性を引き出す取組を意識して授業づくりを行っている様子であるのが、とても良い。	四中の校庭借用ができなくなるなど、年々運動場が失われ施設環境の課題が増している。屋上の運動場化や近隣施設を借りてのクラブ活動等、よく工夫していると思う。学校運営協議会としても近隣に利用できそうな場所がないか、調べてみたが厳しい現状であることが明らかとなった。②については保護者83.6%、教職員97.1%と児童との差が大きく、認識のずれが生じているところが課題である。

学校の特色を生かした領域 <短期的な経営目標>

	4 言語能力・情報活用能力の向上	5 特別支援教育の推進	6 地域との連携
自己評価	(1) 具体的な取組 ①「聴く」指導の徹底を図る。考えを「もつ」「表す」「伝え合う」「深める」授業実践を積み重ね、考えを整理し言語化する活動を通して言語能力向上を図る。また、読書活動を推進し、言語感覚を養うとともに豊かな言葉の獲得を目指す。 ②モバイル端末の効果的活用を推進し、教員の指導力と児童の情報活用能力を同時に向上させる。(指導計画の確実な実施・ICT朝会による情報モラル教育の充実)	(1) 具体的な取組 ①校内委員会を充実させ、迅速な情報共有と支援体制の構築につなげる。校内委員会をSC、SSW、校内通級教室指導教員の参加が可能な日時に設定し、協議の充実を図る。通級指導教員による特別支援教育ミニ研修会を実施する。 ②特別支援教室での指導が在籍学級での指導・支援に活かされるよう、特別支援教室専門員や特別支援教育コーディネーターを窓口として円滑な連携を図る。	(1) 具体的な取組 ①「地域学校協働本部」のコーディネート力を活かし、ゲストティーチャー等、外部人材の活用による体験的学習の充実を図る。CSの理解を得ながら「放課後教室」「漢字検定」の円滑な実施につなげる。 ②新体制となるPTAや地域学校協働本部コーディネーターとの連携を図り、春の体育的行事や秋の学芸的行事の充実につなげる。
	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)	(2) 成果(数値目標に対して)
	①学校評価アンケート(児童・保護者)の関連項目への肯定的回答目標：80%以上 結果：「言語活動(学習での表現活動)」児童：83.8% 保護者：70.4% 結果：「言語活動(言葉遣い)」	①学校評価アンケート(児童・保護者)の関連項目への肯定的回答目標：75%以上 結果：「特別支援教育」児童：75.8% 保護者：79.4%	①学校評価アンケート(児童・保護者)の関連項目への肯定的回答目標：80%以上 結果：「地域学校協働本部」児童：82.4% 保護者：85.1% 結果：「体験的な学習活動」

	児童：81.6% 保護者：70.7% 結果：「読書活動」 児童：77.2% 保護者：85.6%			児童：80.7% 保護者：76.3%		
	②学校評価アンケート（児童・保護者）の関連項目への肯定的回答 目標：90%以上 結果：「基礎的な学力」 児童：85.4% 保護者：88.8% 結果：「ICT 機器の活用」 児童：88.7% 保護者：74.7% 結果：「ICT 機器のルール」 児童：84.5% 保護者：75%	C	② ②「個別指導計画」「個別の教育支援計画」の作成 目標：100% 結果：100% 目標：巡回指導教員と学級担任との連携の場の設定。 結果：指導計画等の作成及び加筆時期に合わせて、担任と巡回指導教員との連携相談週間を設定したことで、情報共有や支援方法等の検討時間を確実に確保することができた。	A	②協働本部コーディネーターと管理職との打ち合わせを月1回実施し、翌月の取り組みや予算執行状況の確認等を行い、円滑な活動につながった。 PTAのお手伝い協力をお願いした行事については、事前に管理職や行事委員長等との打ち合わせを実施し、円滑な運営につながった。	A
学校運営協議会評価	言語活動については、学習の中に意見交流の場面を意識的に設定していることが、児童の認識につながっていることが推測される。一方、保護者の認識は児童結果と比べ10Pt以上低くなっている。殊に言葉遣いに課題を感じている様子である。家庭・地域・学校が連携して指導していく必要がある。本校のICT通信環境の改善は喫緊の課題である。		学校が組織的に子供たちを支えようと工夫していることが分かる。SCやSSW等に相談したことがない保護者にとっては、相談事が持ち上がった際に初めて認識する職員かもしれない。今後も継続的に学校の取組や相談方法を保護者に周知し、相談しやすい環境づくりをしていくことが大切だと思う。	体カテストの補助や家庭科の実習場面での補助等のボランティア募集及び調整や漢字検定、放課後学習教室、ゲストティーチャー招聘等々、地域コーディネーターが窓口となって行われる数々の取組が充実しており、学校の教育活動を支えている。PTAも日常的な活動だけではなく、教員と連携しながら学校行事の運営を支えてくれており、大変有難い。		

人材育成・組織運営	
自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>令和8年度から市内一斉実施が示されていた「教科担任制」について、経営支援主任を中心に試行と推進を図り、学期ごとに成果と課題を整理しながら、大規模校である本校に合った形を模索し、準備を進めることができた。</li> <li>より良い教育活動を目指して、教務主任を中心に学期ごとに教職員アンケートを取り、多様な意見を出し合いながら共通理解や改善につなげていくことができた。また、今年度から始まった「こころの健康観察」については、生活指導主任が主導して児童理解の一助となるように全体への周知・活用を図り、定着させることができた。</li> <li>年度途中の教員欠員に対応して、高学年算数少人数指導担当の教員を学級担任に置く状態となったが、一部教科担任制や交換授業を活用しながら、各教員がプラスαの働きをして支えてくれた。学年の教員全員で学年の全児童を見取り、指導・対応していく体制が根付きつつあり、皆で相談し合い、支え合おうとする職員室の風土が醸成されてきている。</li> <li>児童数900名を超える中でも個々のニーズに応じた支援を充実させるため、特別支援教育コーディネーターが果たす役割は大きい。コーディネーター主任、副主任を中心に情報共有や関係諸機関との連携が円滑に進むよう、6名のコーディネーターが役割分担をしながら全体周知や進捗状況の確認等を行い、情報共有が進んだ。また、巡回指導教員によるミニ研修も複数回実施することができた。</li> <li>校内研究は、今年度より「主体的に学ぶ子の育成」を主題に掲げ、教科を限定せずに各学年の実態に即した研究に取り組んだ。新たな主題による初年度の研究ながら、研究主任を中心に計画的な推進が図られ、複数学級による研究授業の実施や事前授業等が意欲的に行われた。</li> </ul>
学校運営協議会評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校評価のまとめを見ると、教職員の「A」評価が少なく、自分たちに厳しいことが窺われ、過剰に頑張りすぎていないかと心配になる。もっと楽しんで職務に当たってもらいたいし、その方が子供たちにも良い影響を与えると考える。学校だけでは如何ともし難いであろう様子の児童も見受けられる中で、教員が責任を背負いこんで潰れてしまわないよう、学校運営協議会としても相談に乗り、支えていきたいと思う。</li> <li>「わかばスポーツ大会」や「わかばステージ」を通して、学級数が多い中でも、学年でよく連携して取り組み、子供たちの主体性を活かしたものになるよう、先生たちが工夫し頑張っていることが伝わってきた。良いチームワークが育まれており、今後もこの雰囲気継続させていってほしい。</li> </ul>

中期的な経営目標の達成状況
<p>① 自己指導能力を高め、自他の命を大切にし、自律した言動がとれる児童を育成する。 ⇒児童アンケート結果からは、8割を超える児童が自身の「基本的生活習慣」「言葉遣い」「多様性への理解と尊重」への理解が定着できていると回答している。しかし、少数ながらも学年を問わず、自身の中に湧き上がる負の感情をそのまま表出し、大泣きや暴言がなかなか収まらないなど、自制心や社会性といった非認知能力に課題が見られる児童も見受けられる現状がある。家庭との連携や関係する教職員等との協働体制を更に強化し、児童の自他の命を尊重する心情の涵養や自己指導能力向上のための指導を充実させていく必要がある。</p> <p>② 自己肯定感を高め、基礎基本の定着を図り、自身の学びを自覚させるとともに、主体的で対話的な学びを通して考えを深める児童を育成する。 ⇒令和7年度全国学力調査における平均正答率はいずれも都や全国平均を上回っており、学力の定着が図られているものと捉えられる。しかし、児童アンケートで『「わかった』『できた』と実感しながら学習している』の項目の肯定的回答は85.4%に留まる。自身の学びを自覚させ、自己肯定感を高めていく必要がある。</p> <p>③ 健康保持・体力増進への意識を高め、自ら考え判断し、粘り強く実践する児童を育成する。 ⇒屋上の運動場化、クラブ活動における近隣施設の借用、縄跳び月間の取組等の工夫はしているものの、運動場所の確保自体が一層困難になっており、大変頭が痛い状況である。市教委との相談連携を強化するとともに、なお一層の工夫が求められている。</p> <p>④ 言語能力と情報活用能力の向上を目指し、言語環境を整え充実させるとともに、モバイル端末の効果的活用を情報モラル教育と一緒に推進する。 ⇒各教員が学習活動の中で意見交流の場を意図的に入れたり、国語辞典を日常的に活用させたりして、言語能力の向上に努めている。しかし、読書活動の二極化は解消されておらず、言語表現を苦手とする児童も少なくない。一層の工夫と授業改善が必要である。また、学校全体としてICT機器の効果的活用を模索し、ミニ研修を重ねたり、ICT朝会による情報モラルの意識向上を図ったりして、情報活用能力の向上に努めている。引き続き市教委と連携しながら、通信環境の改善とICT機器の効果的活用が進むように努めていく必要がある。</p> <p>⑤ 特別支援教育を推進し、SSやSC、SSW、巡回指導教員等を含めた全教職員及び関係諸機関との組織的連携を強化していく。 ⇒児童アンケートで「相談できる大人が学校にいる」という項目に75.8%が肯定的回答をしているが、8割には届いていない。保護者を含め、引き続き広報等による周知活動が必要である。</p> <p>⑥ 学校運営協議会委員を中心に保護者・地域との連携を密にし、教育活動の充実と安全確保を図る。 ⇒CS初年度となった令和7年度は、委員の方々とともに熟議ができる体制づくりができた。今後一層の熟議を図っていく必要がある。</p> <p>人・組 職層に応じた自身の役割を自覚し、学校経営方針を実現させるための取組を意識し、工夫しながら協働的に動くことのできる組織を構築する。 ⇒学年団によるOJT、学校全体としてのOJTを両輪で進めつつ、教職員が同じ方向性をもって教育活動を進めていくことができるよう、引き続き、職層に応じた役割に対する当事者意識を涵養していく。</p>
次年度の重点課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>多様性を真に理解し、互いを尊重し合う人権教育の取組。非認知能力の向上と学ぶことへの主体性の醸成。</li> <li>運動スペース狭小化が一層進んでおり、児童の心身への影響が非常に懸念される。運動場所や機会の確保が大きな課題。</li> <li>児童用モバイル端末の更新を機に、情報モラルを一層定着させる事。情報活用能力を向上させていくための環境整備や取組。</li> <li>教育活動と並行して進めていかねばならない、令和9年度末予定の移転に向けた準備。</li> </ul>